

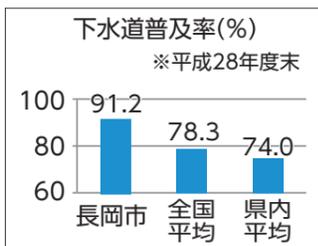


表町の雨水貯留管整備に向けて巨大掘削機の搬入 (平成29年6月1日)

普及率は 全国トップクラス

現在の長岡市の下水道普及率は91.2%。先人の功績と市民の協力により全国トップクラスを誇ります。

整備中の中之島、寺泊地域では、早期の完成を目指し、工事を進めています。



全国に先駆けた技術 復興の経験を東北へ

暮らしへの影響を大幅に軽減した管の更新技術

長岡市は平成13年から、全国に先駆けて老朽化した管の新たな更新方法に取り組みました。当時の最新技術である「管更生工法（内面被覆工法）」です。地下工事ではあっても地面を掘る必要がないため、交通への影響がほとんどありません。



▲ガスを精製する①精製塔と②ガスホルダ

全国初、1,000世帯分の バイオガスを民間業者に売却

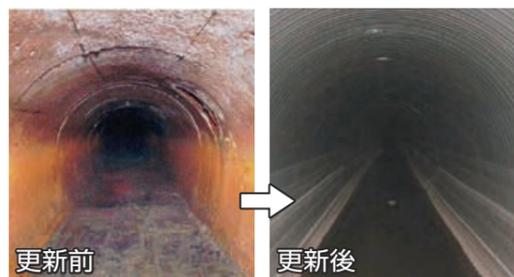
平成11年、汚泥から発生するバイオガスを全国で初めて民間ガス会社に供給したのは長岡市です。量は年間約55万m³で一般家庭1,000世帯分。ガスの不純物を除去（精製）する先端技術は同年、「いきいき下水道賞建設大臣賞」を受賞し、注目を集めました。



相馬市の細田ポンプ場

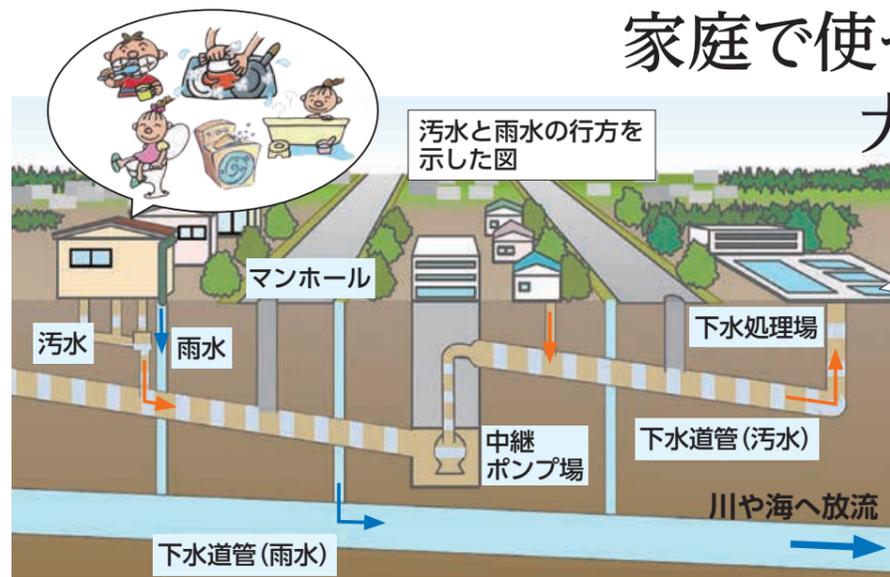
中越大震災の経験を東北のために

また、長岡市は平成23年の東日本大震災のとき、福島県相馬市の復興支援のため職員を派遣しました。その数は6年間で11人。中越大震災での液状化対策などの経験を活かし、下水道管約13kmを復旧しました。さらに、海岸部の地盤沈下による浸水対策として、雨水ポンプ場の建設を支援しました。



▲大正13年に建設し、「管更生工法」で更新した呉服町の下水道管。内側を表面が滑らかな管で覆うことで、水の流れる早さが増し、たくさんの水を流せるようになります

家庭で使った水をきれいに。大雨から命を守る。



長岡中央浄化センターを見学する中島小学校の児童(6月6日)

明治時代、都市の人口が増えると、低地に流れず溜まった汚水などが原因で、伝染病が流行しました。その惨状を救ったのが下水道です。

現在、私たちが洗濯やトイレで使った「汚水」は、地下にある下水道管を流れて下水処理場にたどり着きます。そこで、汚水に含まれる大きなごみや砂をふるいにかけて、残った汚れを微生物が食べて成長。大きくなった微生物が下に沈むことで、水はきれいになり、川や海に流れます。取り除いた汚れや微生物の塊は「汚泥」と言い、埋め立て処分をされたり、建設資材やエネルギーなどに利用されたりします。

雨水を流し 浸水対策の役割も

下水道は一方で、大雨から命を守る働きも担っています。

現在の都市は、道路や建物の敷地がアスファルトなどで覆われ、「雨水」は地面に浸透しません。この雨水を側溝から地下に取り込み、川や海に流しています。

特に、ゲリラ豪雨が発生した際は、雨水ポンプ場や地下に雨水を一時的に溜める貯留施設で、浸水被害などを防いでいます。

「金山を掘ることと同じ」 普及を訴えた先人



▲大正13年、本町2丁目(現在)の下水道整備工事。機械はなく、人海戦術で36kmを4年間で整備しました

◀長谷川 泰 (1842～1912年)

下水道の歴史は古く、明治33年、下水道の普及への理念を定めた下水道法が日本で初めて制定されました。その中心人物が長岡出身の医師・長谷川泰です。内務省衛生局長（現在の厚生労働大臣）だった泰は「下水道を整備されれば流行病がなくなり、健康な労働者が富を造る」「下水道を掘ることは、町の中の金山を掘ることと同じだ」と力説。下水道の普及にまい進しました。

長岡の下水道整備は大正13年から始まり、上水道との同時施工は全国7番目の早さとも伝えられています。

その後、昭和20年の長岡空襲にも耐え、昭和51年には市内で初めて下水処理場が建設されました。